

またや見む交野のみ野の桜狩り花の雪散る春のあけぼの

藤原俊成

『新古今和歌集』「春」の一首。

「また見ることがあるだろうか。交野の禁野の桜狩りの、花が雪のように散るこの美しい春のあけぼのを」。

交野の禁野は現在の大阪府枚方市禁野のあたり、平安時代の皇室領の遊獵地。皇室領で私人の狩獵が禁じられた野が禁野である。その交野で桜狩りを楽しみ、そのまま一夜を明かしたあけぼのの美しさを詠んだ。

しいんと静まりかえった夜明けのころ、雪のように乱れ散る花。神秘的で優艶な無音の世界に、しばしうつとりとするが、詞書によれば摂政太政大臣・藤原良経邸での五首詠の一首、春の題詠なのである。

しかしこの歌には、美しいだけではない、どこか荒寥とした孤独の迫力が感じられる。初句切れ「またや見む」から「交野のみ野の」とうたいだすまでの、ほんの少しの間。



また見ることがあるか、とふと口をつぐむその空白にももる「もうないだろう」との思い。そして、だからこそ「の」を重ねる華麗なりズムの力。このとき俊成八十二歳。

一方で、俊成が意識したであろうと思われるのは、交野を舞台とする『伊勢物語』八十二段「渚の院」。惟喬親王と親しい家臣たちが、交野での鷹狩りもそこそこに、渚の院（水無瀬の離宮）の桜のもとで宴をする。むろん業平らしき人（右の馬の頭）が歌を詠む。たとえばこの歌。

世の中にたえてさくらのならせば春の心はのどけからまし  
在原業平『古今集』

（世の中にもし桜がなければ、春の心はどんなにかのどかでいられるだろう）。

交野は桜の名所であり、鷹狩りの名所でもあった。俊成の歌では鷹狩りはしていないが、「桜狩り」の「狩り」により鷹狩りの躍動的なイメージが引き寄せられる。

美と躍動。華麗と荒寥。夢幻と断念。新古今歌風の先駆者・俊成の、老年の底力を見る思いがする。

（小島ゆかり）